

研究ノート

大学近隣小学校の生活科「町探検」訪問に関する実践報告

The Practical Report of the University Visiting of the Local Elementary School Students for the Learning in the Living Environment Studies

大貫 麻美 (白百合女子大学)
Ohnuki Asami (Shirayuri University)

白百合女子大学人間総合学部初等教育学科では、教育体験活動を大学入学年次より導入している。2021年度及び2022年度に「教育体験Ⅰ」と連携する形で、生活科の「秋探し」の活動を白百合女子大学で活動を行った調布市立緑ヶ丘小学校の2年生のうち、町探検の訪問先として白百合女子大学を選定した児童の訪問を2022年12月1日と15日に受けた。児童から受けた質問内容は白百合女子大学の沿革、構内環境や設備、人や生活と多岐にわたるものであった。教職を志望する学生が一部同行しており、担当した教職員および学生のいずれもが、児童の質問等から新たな気づきを得たことなどがあった。訪問受け入れの準備や当日対応については、担当者の所属部署以外からの支援も効果的に働いており、学内連携・協働の意義や重要性が確認された。

1. はじめに

白百合女子大学人間総合学部初等教育学科では、学科新設当初から大学入学年次より履修可能な教育体験活動の授業を設置している。1年次から履修可能な科目「教育体験Ⅰ」について、新型コロナウイルス感染症の流行拡大に伴い、2020年度は休講としたが、2021年度は新型コロナウイルス感染症の流行拡大下においても実施可能な方策を授業担当者が検討した上で実施をした。大貫ら(2022)では、その活動の実践報告を行った。2022年度においても、この2021年度版の内容を踏襲する形で「教育体験Ⅰ」が開講された。

「教育体験Ⅰ」(担当:大貫麻美・石沢順子・中田正弘)では、小学生を対象とした教育体験活動の立案と実施を受講生が行う活動が含まれる。受講過程で学生は、白百合女子大学の特性を考慮しながら、大学キャンパスの自然を生かした教育活動等を検討し、実際に大学近隣の小学校の児童を対象として実践を行っていく。2022年度には、大学構内の森を活用した「秋を探そう」(小学校の生活科と接続した活動)と、「季節の挨拶状を作ろう」(大学紹介及び小学校低学年を対象とした外国語活動と算数の内容領域を横断して行うグリーティングカードづくり活動)の2つの教育活動の立案と実施がなされた。

この「教育体験Ⅰ」の授業と呼応する形で、生活科「秋を探そう」の活動として白百合女子大学を2022年11月1日(火)に訪問した調布市立緑ヶ丘小学校の2年生のうち、生活科「町探検」の調査対象として白百合女子大学を選定した児童が同年12月に再度、白百合女子大学を訪問した。その訪問の様子と、児童から受けた質問内容等について、以下に報告する。

2. 生活科「町探検」に伴う児童の白百合女子大学への訪問

2022年12月に、調布市立緑ヶ丘小学校の2年生の児童3名と引率の保護者、教員が生活科「町探検」の一環として白百合女子大学を2回訪問した。

児童は1ヶ月前及び1年前の計2回、「秋探し」で白百合女子大学を訪問している。児童は1年次の「秋探し」では大学構内のドングリが多く拾える森の中で、2年次にはマツカサが多く拾える中庭周辺で活動をしていた。「町探検」の活動に先立ち、白百合女子大学の外観等を手がかりに、小学校で質問を考えた上での来学となった。

1回目の訪問となった12月1日(木)には、初等教育学科教員で社会連携センター員でもある本稿著者(以

下担当教員)と、初等教育学科の3年生3名が探検活動に同行をした。児童は、初等教育学科研究室で大学構内地図が入ったパンフレットを受け取った後、白百合女子大学について疑問に思ったことを担当教員や、チャペルでアドヴェント準備をしていたカトリック教育センター職員にインタビューをして記録を取っていた(図1, 図2)。1回目の訪問後、小学校での活動を経て生じた新たな疑問を解決するために、12月15日(水)に再度訪問があった。ここでは、1回目の訪問時に同行した担当教員に加え、社会連携センター職員も同行した。



図1. 生活科「町探検」に伴う児童の訪問

児童は初等教育学科研究室でパンフレットを受け取り、学生と構内地図や写真を見ながら訪問したい場所等を確認した上で、探検活動を行った。

3. 生活科「町探検」で示された白百合女子大学についての質問

「町探検」に伴って児童より担当教員が受けた質問は非常に多岐にわたっていた。その内容を大別すると、白百合女子大学の沿革、構内環境や設備、大学に関係する人やその生活に関することとなっており、大学構内のモニュメントや施設等と白百合女子大学の歴史や教育とを結びつけながら、説明を解釈・確認する様子が見られた。

○白百合女子大学の沿革

- (例)・白百合女子大学の名称の由来
- ・白百合女子大学の歴史
 - ・シャルトル聖パウロ修道女会との関係

○白百合女子大学の構内環境や設備

- (例)・教室、体育館、図書館等の規模や種類(小学校との対比)
- ・構内にあるモニュメント
 - ・門扉
 - ・3号館上の十字架や鐘
 - ・チャペル
 - ・修道院
 - ・めぐみ荘
 - ・構内の動植物
 - ・構内の設備(水栓、貯水槽等)

○白百合女子大学の人や生活

(例)・授業時間や授業内容

- ・授業の履修方法
- ・学生の一日の動き, 学習方法
- ・教員の一日の動き, 授業方法
- ・修道院の人の生活や活動
- ・職員が行っていること
- ・アドヴェントやクリスマスの行事内容

町探検は3つの階層で示される生活科の内容(文部科学省, 2018)のうち, 基盤となる第1の階層の内容にある「地域と生活」に直結する内容であるが, その上位層となる第2の階層の内容にある「公共物や公共施設の利用」, 「季節の変化と生活」, 「生活や出来事の伝え合い」などにもつながりうる活動である。今回訪問した児童も, 公共施設に関する問いに加え, 11月の秋探検で訪問した時よりも木々の紅葉が進んでいる様子やアドヴェントに伴う構内の様子の変化について感想を述べたり質問をしたりしており, 季節の変化や生活などに関する気付きも得ている様子が示唆された。

4. おわりに

今回の訪問準備に際しては, 正しくなおかつ児童にわかりやすい説明となるよう, 担当教員の所属する初等教育学科研究室や社会連携センターだけでなく, 入試広報部やカトリック教育センターに情報提供や当日対応等について支援を受けながら実施した(図2)。

児童の探検活動に同行した白百合女子大学の教職員や学生のいずれもが, 児童からの質問等により白百合女子大学やその教育について再考したり, 新たな気付きを得たりしたという感想を持っていた。海老原・大貫(2019)はポーリニアン(聖パウロ修道女会の創立精神に関わり, 理解し, 体現しながら社会に示すことのできる者)を育成する白百合女子大学の教育のあり方として, 「専門・学部学科・部署を横断しての授業開発や新たな協働」の試みが必要であることを述べている。また, 石沢ら(2021)は, STEAM教育を事例としながら, 教職志望学生が教育プログラムの立案を体験することにより, その教育法について理解を深めていく様子を報告している。

今回の町探検受け入れに際しても, この協働の重要性が確認された。また, 教職を志望する初等教育学科の学生にとって, 今回の町探検で訪問受け入れの準備や当日対応をする教職員の様子を知ることは, 町探検で訪問を受ける立場について知る機会とともに, 学内における他部署との連携の意義や重要性について知る機会にもなったことが示唆される。

謝辞: 調布市立緑ヶ丘小学校の関係各位, 白百合女子大学の入試広報部, カトリック教育センター, 初等教育学科研究室, 社会連携センターの関係各位, 町探検に同行した初等教育学科の学生, 「教育体験I」担当の中田正弘特別専任教授, 石沢順子准教授に謝意を申し上げる。また, 本稿は一部, 科研費 No. 17H01982 の助成を受けた内容を含んでいる。

引用文献

- 1) 海老原晴香・大貫麻美(2019) これからの時代を見据えた白百合女子大学における教育への展望: Society5.0を生きるポーリニアンの育成を目指して, 白百合女子大学研究紀要, 55, pp. 1-18.
- 2) 石沢順子・大貫麻美・椎橋げんき・奈良典子・原口のみ・稲田結美・佐々木玲子(2021) 保育者・教育者

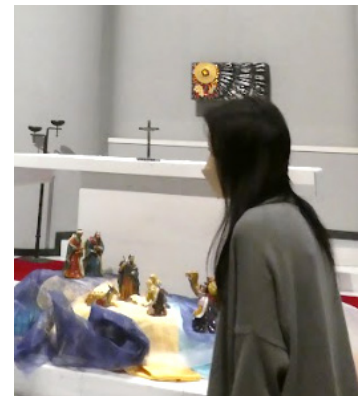


図2. チャペル内の様子

カトリック教育センター職員の話からアドヴェントでは, まだ赤ちゃんイエスが生まれていないことを知った。

養成課程における健康教育の指導法に関する事例研究 (1) STEAM 教育の視点を活かしたプログラム立案の導入, 白百合女子大学研究紀要, 57, pp. 251-268.

- 3) 文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 生活編, 東洋館出版社.
- 4) 大貫麻美・石沢順子・中田正弘 (2022) 初等教育学科「教育体験 I」(2021 年度・後期集中科目) の実践報告, 保育・教育の実践と研究, (7), pp. 63-67.